

授業方法について独自に工夫していること 【創造科学系】

学生同士で考え方を深めていけるように、当日の授業の概略以外の時間は、話し合いの時間を多く設けた。新しい話題を多く取り入れることで、これまでの事とこれからの事を考えやすく授業を展開した。

電気Iの内容は電気磁気学であり、受講生が小学校から高校の理科の中で必ず関わってきた内容であり、常にその振り返りを利用し、受講生の理解のハードルを低くした状態で中身に入っていくようにし、その後順次深める授業としていく工夫をした。電子工学IIは、基本的な内容は座学で授業者が一方向的に話をする形をとるが、受講者の理解を深める場面では、グループ討議を行うような工夫をした。

特記すべき工夫はないが、活動内容の振り返りを促す課題を出した。

学生が主体的に授業に参加できるよう、講義の後、生涯スポーツの実践として、ニュースポーツを取り上げ、自らが将来指導者になることを想定した実践型授業を行った。

授業内容が多い部分について、効率よく伝えるためのパワーポイントを作成し、学生には同じものを印刷して配布しました。
授業内容についての理解具合を確認するため、毎回、確認テストを行いました。
実物を提示し、回覧してもらいました。

学生側の理解。

- ・高校までの経験(無意識に目にしてきた学校保健活動)→理論化(どういうしくみが取られているのか)
- ・高校生の立場では見えなかった活動→新知識。
- ・学生のこれからを支えるような、賞味期限の長い知識。

各学生が主体的かつ、自主的に学ぶことができるように、「学習課題」を毎時間設定しています。

授業内容の質問について、毎回、全受講生を対象に「大福帳」の記載で往復していますが、それでも下記(4)の結果もあります。

下記(4)の内容

授業難易度について、「難しい」とするアンケート結果が、美術平均(23.2%)を相当上回り、(53.1%)となっている。→では「易しく」すれば良いか?!という訳でもないと思っています。一方で「週当たりの学習時間3h以上」が34.4%(美術平均14%)は、大学教育として適切と考えています。

教科書を準備して活用している。また、社会的な動向に関連させながら基本的な原則の解説を行った。

学生の興味関心の度合いをみて、次の講義での内容を考える。

パワーポイントによる授業ではなく板書、また実習をとり入れたこと。

スライドや実物によるデザイン事例を示して、これまで学生の中になかった概念に気づかせるようにしている。それによって、デザインが表面的なことに終始するのではなく、多様性を持って拡大していつていることを認識してもらうようにしている。

本授業のうち約半分は、愛知県内の伝統的工芸品の産地から伝統工芸士の方々にお越し頂いて、伝統的工芸品について直接お話を伺ったり、実際に制作工程を体験させて頂いたりする内容となっている。この内容の授業を行ったのが平成24年度の「工芸論」という授業であった。平成23年度に愛知県産業労働部産業振興課から愛知県内の伝統工芸士の方々を派遣する事業に関して協力依頼があり、このような授業を開始することが出来たが、愛知県からの予算補助は1年目だけで、2年目からは本学の美術教育講座と愛知県伝統工芸士会からの予算のみでこれまで実施して来た。少しずつではあるが、本学のこの授業に協力してくれる産地も増え、内容も充実してきたところであるが、私自身が次年度より幼児教育講座に異動することもあって、本授業は次年度継続できない状況となった。

「日本美術史概論Ⅱ」と「日本美術史研究Ⅱ」は日本美術史の講義であり、独自に作成した授業資料を用意して学生に配布し、画像資料を作成して画像を示しながら説明を加えている。また、後期期間中に数度授業時間内に作成するレポートを課し、学生の理解度を測ると共に積極的な授業への参加を促した。「美術史演習Ⅳ」は4年生対象のゼミであり、毎回一人の学生が各自で設定したテーマについて発表し、発表後に他の学生と質疑応答を行う。また、授業後に発表内容についてのレポートを毎回課している。学生の発表について、事前や発表後に適宜指導している。

グループによる学習を取り入れながら授業を組み立て、学生が主体的に学べるように努めています。

造形基礎Ⅳでは布ができるまでの工程を学び、様々な材料と色を使って、イメージをふくらます。各自でファイルを作り、発表した。

(織)フェルトメイキングを学び、生き物テーマに立体造形を作った。各自で柔らかい羊毛がどの様に固めて形になるのを工夫した。最後に一人ずつ自分の作品の発表をした。
(金工)銅合金によるキーホルダー制作を通して、蝋型石膏鑄造技法の基本を学習する。細工蠟作り・原型制作・湯道付け・埋没・鑄湯・仕上げ・着色・講評と工程を1回ごとに完結させるため、授業時間の配分を工夫した。

できるだけ学生に考える習慣を付けさせる。
正解であるかどうかよりも、考えることの重要性を繰り返し伝える。
学生に緊張感を持たせるために、履修票をランダムに束ね、めくられた履修票の学生を指名する。

学生同士が学び合い、意見交換して自らの問題意識を深めることが出来るよう、また様々な考え方を受容すると同時に、自らの意見や主張、考えを明確に述べる事が出来るように授業設計を行い運営した。具体的には、毎回の授業において学習内容を実践する機会を多く設けること、学生同士で意見交換する時間をとり、中でも司会など役割分担をしてディスカッションが深まるようにすること、学生同士だけでなく教員と学生間においても意見を言いやすい環境づくりをすることを大切にしたい。

実習ですので、学生の皆さんが将来自身をもって仕事ができるように、正しい技術をしっかりと身に付けてほしいと思っています。納得がいくまで一生懸命に制作したバッグや段階標本などは、生涯の宝になるものと信じています。
そのためには、学生さんの皆さんにわかりやすくするために、段階見本や、完成見本を見てもらいながら説明したり、制作のポイントとなる部分の図や、注意点をかいて示したりすることで、難しいと思われるところも気を付けて制作できるようにしております。目標をもって意欲的に取り組んでくれることを願って、先輩の作品や意見を参考にしてもらおうようにもしております。机間指導をすることで、一人一人に寄り添ったアドバイスができると考えております。

両授業は人数多過による同授業のリポートであるので、コメントは同じ。
家庭科の衣食住の一端である衣生活に関する実験授業であるから、毎日着用している被服の素材面に注目し、被服がどのように生活環境に対して、身体の健康保持に関与しているかを実験的に学ばせ、生活の中で被服のもつ役割を体感すると同時に確認させることを目差している。日常生活では気付かない被服の身体へ及ぼす素材的性質が理解されるような観点から繊維の種類の違いにより、それから作られる布の性質がどのように異なってくるかを認識させ、被服がいかにかまう着用されているかを確認できるような実験行わせ、その発現する性質の理論的根拠を調査させるようにして、毎回実験についてのレポートを提出させ、その内容の点検により、実験内容の意味を示唆することにより、より完成したレポートを書かせるようにしているのが授業法としての工夫である。

実技中心の授業のため、通常の1対1の進め方では一人ずつに割ける時間が少なくなってしまうため、グループプレッスンという方法で行い、さらに、学生同士で学びを深め合うグループ活動に時間をかけている。特にピアノの実技は一人で勉強することが多いため、グループでの学びによって、新たな発見があることを期待している。

- ・最終回までの資料を一括してダウンロードできるようにし、学生のペースで予習が可能なようにした。
- ・授業で扱う作品の図版を張り付けたノートを用意し、講義内容の記録に便宜を図っている。

できるだけ、学生が自分から学ぶ姿勢が取れるよう、課題等を設定している。

博物館教育論の基本的な理論・概念の教授に加え、ワークショップや企画展の記念講演会、美術館学習、藤井達吉の万葉仮名の読み下しなど、具体的な事例を挙げて伝えることを心がけている。これについては、学芸員としての日々の経験が生かしていると考えている。3名の勤務先である碧南市藤井達吉現代美術館では「アートによる学習支援推進事業」としてアートカードを作成し、小中学校における出前授業などで鑑賞教育を行っているが、このアートカードを用いたゲームを学生に実際にやってもらい、教育現場における実践について理解を深めてもらっている。また大学での講義に現地授業を組み合わせ、講義内容の応用などが学べるようにしている。更に浅野・土生が美術の学芸員、豆田が歴史の学芸員であることから、それぞれの専門をもとに幅広い知見を紹介するようにしている。

ビジュアルコミュニケーションと社会の現状と学生個々のニーズを考え、知識・技術・能力を養うためには学生個々とのきめ細やかなコミュニケーションが最重要だと考える。
学生一人ひとりの個性を伸ばすコミュニケーションのあり方を授業毎に考えている。
ビジュアルコミュニケーションの在り方は常に変化していくものであるため、最新のアプリケーションと情報伝達技術に関する研究と対応は怠る事のないよう努めている。
学生にあたっては、特に「考える力」を身につけさせるため、先ずは問いかけること、そして様々なケースを見せる展開を試みた。

授業の最終目標は舞台上で自分達が創った作品を発表することとしている。
そのため、こちらから与える授業スタイルではなく、学生から動きやテーマを引き出せるような実技を用い、ブレインストーミングなどの手法も用いながら創作する過程でつまづきを少なくするような工夫をしている。
また、2人組の活動から徐々に人数を増やし、最終的には8人でグループ創作を行う。
皆が積極的に参加できるように人数の調整も行っている。

どのような基準で学業成績の結果を出したか。 【創造科学系】

知識を問う課題ではなく、学生の考えを深めさせ、考えを表現させる課題を授業毎の小レポートと最終試験で行った。よって、基準は自分の考えを論理的に述べてられているものに関しては高評価を与えた。一方自分の考えでなく、配布した資料で得た知識を述べるだけの学生に関しては、低評価を与えた。

シラバスに明記したように、報告書、期末試験、授業態度を総合して評価した。

「身体・運動感覚との対話・分析・交流」をテーマとしたので、そのテーマへのアプローチ姿勢と到達度合いを評価した。

授業の取り組み姿勢、企画・運営、出席状況などを総合して評価した。

期末試験の得点のみで評価しました。
成績評価の基準は80点代:A、70点代:B、60点代:Cでした。

高校まででは知り得てこなかった、新しく知った知識(学校保健のしくみや意図、課題)の量と質

主に、「出席・態度」「毎時間の振り返り」「レポート」「最終作品の出来具合」を基に、成績評価を行いました。

シラバスにも記載どおり、振り返りとしての「ポートフォリオ」評価が中心で、それに出欠について(欠席について若干の減点)で評価。

テストの成績を基本とし、各授業への出席状況も加味して、総合的に評価した。
今回のテストの特徴としては、問われたことに関する定義的な説明に留まった解答が多くみられた。求められているのは、そうした概念を用いて考察することにより得られたり、提案に結び付いた計画内容である。そこまでの解答を行っているものは少なかったのが残念である。授業内容は基礎的なものであり、社会に応用するという視点・問題意識をもって取り組んでほしいものである。
高校の教科書についても、学習されていないレベルであった。

出席率・受講態度と最終試験の総合点。

試験結果を主として、全員合格となった。

課題に対する意欲と提出物、及び出席率。

愛知県内の伝統的工芸品の産地の方々にお越し頂く授業以外に、7~8回分の授業では、次のような内容で授業を行っている。伝統的工芸品に関する基礎知識について・伝統的工芸品のうち陶磁器に関する産地を産地ごとに紹介・受講生各自で伝統的工芸品の産地の中から一つを選んで小学校または中学校の子どもたちが伝統的工芸品について学ぶ際の資料づくりを行ってもらっている・授業の中で扱った内容に関してペーパーテストなど。これらの各内容について、成績を出し、それらを総合的に判断して成績を点けている。

「日本美術史概論Ⅱ」と「日本美術史研究Ⅱ」については、授業時間内に作成するレポートの他に学期末にまとめた枚数のレポートを課し、授業内容の理解度や参加の姿勢を対象に、到達目標にどの程度達しているかを基準に成績評価した。「美術史演習Ⅳ」については、発表内容に関して先行研究の踏まえ方、考察の合理性などの水準とパワーポイントを用いた発表方法、及び事後レポートを含めた授業への参加姿勢を評価の対象とし、到達目標にどの程度達しているかを基準に成績評価した。

AとBの評価中心とした。学生は熱心に授業に参加した。皆さんは作品の提出も締め切りに間にあった。

(織)AとBの評価中心とした。学生が熱心に授業に参加して、締め切りまで作品の提出した。
(金工)提出作品と出席で総合評価した。
※織と金工の成績を足して2で割って成績としている。

ほとんど、小テストの成績で、一部出欠を加味した

到達目標をどれほど達成できているかを総合的に判断した。特に、当該年次で身に付けるべき技能の習得度合いや、授業で扱った内容に対して、自らの意見をどれほど論理的に述べているかを重視して評価した。

製作物(小作品、段階標本)は、全て、製作のポイント項目ごとに分けて採点し、その合計点をもとにその都度評価します。例えば、糸調子、際縫い、糸やペン跡の始末、縫ったら割る、柄合わせ、製作方法、左右対称等、マチの長さ、裁断方法、ファスナー付け、持ち手の付け方、美しさなど、作品によって評価内容や配点は変わります。問題点がある場合は、その内容を書いて作品を返します。それらを直して再提出することで、点数をアップすることは可能です。出欠席や、授業態度なども参考にしております。それらを総合して成績を出しております。

到達目標をどれほど達成できているかを総合的に判断した。特に、当該年次で身に付けるべき技能の習得度合いや、授業で扱った内容に対して、自らの意見をどれほど論理的に述べているかを重視して評価した。

出席、予習(授業の準備)、グループ活動での姿勢、最後の演奏発表、などを総合的に判断している。

学期末に実施するマークシート式の試験により成績を確定している。基礎的な設問のみで60点をとれるよう配慮はしている。

出席率や提出物やレポート等の提出率や内容を総合的に判断した。

シラバスに記述したとおり、授業への参加度を30%、期末レポートを70%として採点した。レポートについては、課題に充分に応えているか、自らの意見を明確に述べているか、論理的な記述ができているかに留意して評価している。

・出席率 (1/3=5回以上の欠席は不可)
・授業態度(向上心をもって意欲的に取り組んでいるか。積極的に質問やディスカッションをしているか。)
・実技課題の評価(3~5の実技課題の評価)
・修得度・向上度
上記の項目を10段階で評価し、それらの平均値を割り出し評価点とする。

ダンスの技能(なりきっているか、生き生きと踊れているか)
作品創作への積極性(どれくらい意見が言えているか、動きを自ら提案しているか)
出席回数

アンケート結果を受けて改善したいところ 【創造科学系】

週当たりの学習時間で約半数がなしと回答していることについて、今年度は教員が話題を提供することしか行わなかったことが原因だと考えるため、次年度以降は、話題を学生が自宅で調べることで提供することを行い、自宅での学習を促すように試してみたいと考える。

ほとんどの設問に肯定的な解答であるが、授業の難易度に「難しい」・「難しすぎる」と解答した受講生が半数近くおり、それにもかかわらず、学習時間の時間が0或は1時間以下の受講生がいることに、改善の余地があるように考えられる。

探究を促す指導の仕掛けと工夫が必要であろう。

授業を受けた上での自主学習(問3)、週当たりの学習時間(問15)がやや低い評価であった。体育の授業の難しい点であるが、課題を出すなどの家庭学習を考えたい。

自分で考え、行動する機会がなかったようですので、課題を提示し、調査するといった機会を設けたいと思います。

反省と改善するのみ。肝心なのは、詳細・具体的に行きことであるため、この内容は別のところで議論していきたい。

出張と授業が重ならないように日程調整を工夫し、学生に迷惑をかけないように努めます。

授業難易度について、「難しい」とするアンケート結果が、美術平均(23.2%)を相当上回り、(53.1%)となっている。

→では「易しく」すれば良いか?!という訳でもないと思っています。一方で「週当たりの学習時間3h以上」が34.4%(美術平均14%)は、大学教育として適切と考えています。

「問13授業の難易度」で難しい・難しすぎるが約4割であったことから、内容について再検討をしてみたい。

本授業により、新しい考えや知識が身に着いたという回答は良好であり授業自体は成功裏に終わることができて安心した。しかしながら、授業を受けた上で自らが主体となって文献調査などしたかという質問に対してはどちらともいえない、あまりそうは思わないなどの回答も多々みられ、本授業が学生本来がもつ勉強をしたいという意欲を引き出すことには至っていないところは強い反省点として残る。

やや授業が難しいという回答も多かったので、難易度を落とすということではなく、より理解をしやすい工夫をしていきたい。

今年度は、特に受講生たちが、これまで以上に熱心に授業に取り組んでくれたこともあり、またアンケートの集計結果を見ても、特に改善するところがないように感じられる。

「日本美術史概論Ⅱ」と「日本美術史研究Ⅱ」については、初歩的な内容から専門基礎的な内容までを講義形式で教授していることもあり、学生の反応を見て主体的な授業参加に導く点にやや難がある。学生からの質問事項をくみ上げることも含めて、より積極的な授業参加を促すよう努めたい。

教材・教具(板書、プロジェクター、配布資料)をより分かりやすいものへ改善していきたいと考えています。

満足している

(織)満足している。
(金工)特になし。造形文化コースがなくなるため、この授業は今年度が最後となる。15～17人の授業人数は実技制作の限界であった。

教員とのコミュニケーションはうまく取れているかの項目で、そう思わないと全くそう思わないと回答したものが4名いたことを反省し、来年度以降の授業に活かしたい。

教材・教具がわかりやすいかという設問について、「どちらともいえない」との回答が多かった。授業結果を鑑みるに、ワークシート等が学生にとって記述しやすい構成でなかったこと、プロジェクター等の機器がうまく機能しない場面が幾度かあったため、その点は準備段階における反省点としたい。
また、この授業のための週当たりの学習時間についての回答は、「1～2時間」以下が非常に多かった。これは授業で達成したい目標のための学習時間からかけ離れていると言わざるを得ない。課題の与え方や学習方法について、より詳しく提示すべきであると考えた。

授業の難易度が高いと考えている学生さんがやや多いですが、技術の難易度を下げたことや、製作物の数を減らしてしまうことは、学習内容や技能が落ちてしまうことにつながってしまうと考えています。頑張っ身に付けたものは必ず役立ちます。何度もやり直しをしたことは必ず身に付いています。今は、修行しているんだというような気持で主体的に取り組めることが出来れば、将来役立つ力が身に付くはずで。そういうことを理解してもらえように、学生の皆さんとのコミュニケーションがもっととれるように、さらにきめ細やかな指導をしていきたいと思っています。

授業が進むにつれ、学生の皆さんに知識や技能が身に付き、上達していることは実感しています。自分が作った数々の作品に対して愛情を感じている姿もよく目にしました。難しいことが出来るようになった自分に自信を持ってください。

自然科学的な実験であるから、その理論的根拠がしっかりと把握できるような裏付けの説明をする時間的余裕が取れればと思うが、学生に調査を行わせ、その調査結果への示唆のみに終わっていることが改善できたらと思う。

また、最初に簡単な実験実習要領書を配付し、実際の実験を行う際により詳細な説明を口頭で述べているが、あるいは要領書自体をもう少し丁寧かつ詳細な内容のものにした方が良かったかもしれないと思っている。

難易度について、易しいという回答が思いのほか多かった。授業で扱う楽曲は技術的には簡単に思えるかもしれないが、そこから音楽を考え深めていくことは決して簡単ではない。その部分をさらに伝え、自分自身で音楽を深めていくことを考えられるような工夫が必要だと感じた。

情報量が多いようなので、内容をもう少し精選すべきかもしれない。

アンケート集計結果の「問11」の結果を踏まえ、学生とのコミュニケーションをより高められるようにしたい。

全ての問いに対して、極少数ではあるが「全くそう思わない」や少なからず「あまりそう思わない」の回答があることから、更にそれぞれが納得できる授業内容やプロセスを構築すべきであると考えます。
全体的な底上げは勿論ではあるが、「難しすぎる」「内容が多すぎる」の回答があることが最も重要な改善点である。易しくすれば習得内容を減らしてしまうため、内容を減らさずに理解しやすくすることが求められている。